

# 平成26年度玄州会職員研究交流会

## 一抄録集一

目的：看護介護実践を行うための知識や理論を取得し、研究によって得られた知識や理論を実践に活かし、ケアの質を向上させる。玄州会において、看護、介護、すべての業務に携わる職員が、気軽に参加でき、施設間の連携及び発表者と参加者が、お互いに研鑽しあうことができる交流会を目指す。

日時：H26年10月9日(木)18時～

場所：光風1階

内容：研究発表

テーマ・高齢者のメンタルケア

・自由テーマ

演題：①高齢者のころ……………光武病院 療養病棟 看護師 山内加代子

②離床の大切さ～もとに戻せ！体内時計～……………

光風 2階入所 介護福祉士 ○草野仁 畑津和男

③認知症の高齢者が自宅で生活するために必要なこと……………

居宅介護支援センター 介護支援専門員 豊永勝也

④光武病院 リハビリテーション課の紹介……………理学療法士 堤康平

担当 光風(加勢田)リバティ(松尾)光武(山内、東谷)

研究テーマ : 認知症の高齢者が自宅で生活を続けるために必要なこと  
所属施設名 : 居宅介護支援センター  
研究者名 : 豊永 勝也

【目的】認知症の高齢者夫婦が自宅において安全に、安心して、その人らしく生活するためには何が必要なのか、支援の経過と課題を報告する。

【症例】氏名 : Aさん 男性 年齢 95歳 要介護 4 平成 26年 5月～  
障害高齢者自立度 : B1 認知症高齢者自立度 IIIb

主疾患及び既往歴 : H25.10 アルツハイマー型認知症、H25.10 両下肢廃用症候群

Aさんは数年前より認知症の症状がでていた。平成 25 年昨年秋頃より認知症が悪化し昼夜逆転、ひどい物忘れが出てきた。物損事故を起こし車の運転が危険となったため、家族が警察と協議して、平成 25 年 11 月精神科の医師に診断書を書いてもらい免許を返上している。その後も自宅から県道まで歩いて出て、車を止めて送ってもらい、警察から迎えに来てほしいと連絡が家族に入ると言ったことが数回ある。また車を購入しようと、業者に電話をかけて実際に納車され、家族はその度に断りの電話をして、宍岐中の業者に車の販売をしないよう依頼をしていた。

肋骨骨折、気胸により 3 月 8 日～平成 26 年 4 月 21 日まで入院する。入院中は車イスでの院内の徘徊、夜間不眠があり車イスに拘束されていた。

ニーズ (解決すべき課題)

①入院中は車椅子での徘徊、夜間不眠があり困っていた。車椅子に拘束されて父も不本意だったと思う。自宅で安全に、穏やかに、父らしくすごしてもらいたい。

②自宅での入浴ができないので困っている。

③外出時の自宅への出入りが安全にできるようにしたい。

サービス担当者会議後の支援内容

①～③のニーズを解決するために以下のサービス利用を計画実行する。

①②通所介護 週 6 日利用 週 3 回の入浴 (デイサービスセンター光風)

③ 住宅改修 自宅出入り口の段差解消工事

①③福祉用具貸与 介護用ベッド、車イスのレンタル (太陽シルバーサービス)

① 福祉用具購入 ポータブルトイレの購入 (太陽シルバーサービス)

①③病院受診時の外出支援サービス (宍岐市の福祉サービス)

①③精神科受診 (次女の代理受診を含む)

① 訪問診療を 6 月よりスタート 月 1 回 (光武病院 光武孝倫 医師)

① ショートステイの利用 2 泊 3 日を月 2 回 (光の苑)

介護サービス計画の実行後の状況

問題発生の都度、家族からの相談がある。自宅内の便汚染については薬の調整や通所介護で週 2 回排便調整をすることでほぼ解決している。しかし尿汚染は毎日のようにあり次女が毎朝給着替えをして通所介護に送り出している。通所介護やショートステイではスタッフの事情が許す限り個別対応で、本人の生活歴を踏まえた対応をしている。日常生活動作の変動があり、移動には車イスを使用するが敷地内を独歩で徘徊する等目が離せない。

【結論】 Aさんは旧制高校卒業後、東京の理系大学を卒業、エンジニアとして大企業に勤務後、会社を起業、86 歳まで社長をしていた。趣味は読書、若いころは柔道、水泳で体を鍛え文武両道の方、会社経営を引退してからは、自分で車を運転して図書館で過ごし、帰りに喫茶店によってコーヒー、トーストを食べて帰るといった生活をしてきた。しかし認知症の進行により車の免許証を返上した頃から急速に症状が進み、現在は毎日デイサービスに通っている。これが本人の望む生活なのかは不明である。

本人は認知症になっても「利用者の思い」を持っている。このような利用者に対して個別性を尊重し、尊厳を保持できるサービスを提供するにはどうしたらよいか？

2025 年には認知症高齢者の人口が現在の 150 万人から 320 万人に増加、団塊の世代の高齢化によりさらに個別性を尊重した対応が求められるであろう。いまからどのような準備をしたらよいかを皆で考えていく必要がある。